異郷での終戦前後

◆佐野　正雄（77歳）

これは満洲錦州省黒山県で技佐だった私の体験である。昭和二十年にはいると戦況はいよいよ厳しくなり、満洲は今後どうなるのか自分たちはいったいどうしたらよいのか不安な一日一日であった。そんな中、同僚は一人、また一人召集され回りから消えていった。県では企画室を作って十人にも満たない日系を集め、当面する問題の審議に当たらせ実務はほとんど満系にゆだねられた。

八月にはいって県勧農模範場に行くと、事務室の雰囲気が変っている。皆、机に布を置いて一生懸命何かを画いている。一人がそっと寄って「場長だけ知っていてください。旗を作っているんです。」何の旗なのか確かめるゆとりはなく、背筋を冷たいものが走るのであった。当時日系は敗戦を考えたくなかったが、満系は日本必敗と読んでいたのであろう。

八月十五日昼、県職員全員が一室のラジオの前に集められた。放送が終った。痛撃であった。誰もが立ちすくんだ状態だった。県長副県長から一言二言挨拶（あいさつ）があって、一率金一封の退職金が渡されるや、これからの運命を一人一人背負って県庁から去るのだった。

日系宿舎は黒山街の一角に土塀で囲まれた中にあった。その西側近くを鉄道が通っていて小高い土手になっていた。その土手に人が集まり始め、日毎その数を増していった。二百人三百人になったであろうか。八月三十一日昼近く、突如としてその群集がなだれこんできた。たちまち宿舎一帯は阿鼻叫喚。絶叫と家を破壊する音とでまさに生き地獄となった。私は長女を抱き妻は次女をおぶって土塀のこわれたところから外へ出た。とたん、着衣をはがされ下着だけとなった。そこは畑で安全そうな山芋畑にしゃがんだ。前のあぜ道をひっきりなしに人が往来する。つと若い男が私をみつけ「佐野（スオイエ）あぶないからこれをやる」と出刃包丁をさし出す。宿舎を回り持ちしていた雇員である。私は断って「早く行け」というとばつが悪そうに走っていった。そのあと面識のない年配の男性が、あたりが薄暗くなるまで私達の前に立ってかくまうようにしていてくれた。

やがて静寂がもどったので、こわごわ土塀の中にはいっ

た。そこは人っ子一人いない荒涼たる廃居であった。私の宿舎も物という物、窓も畳もなくなっていた。便所の床板がわずかに残っていたのでそこに子供を座らせ、土中に埋めておいた缶詰を掘り出し、ミカンを食べさせたのだった。

翌朝明るみはじめたので城門を出、やっとの思いで勧農模範場にたどりついた。ここには開拓団と思える人々が大勢静かに寝ていた。戸をたたいて入れてもらってほっとしたが、この人達は昨日の黒山宿舎での出来事を知らなかった。話をすると室内に緊張が走った。その時窓がたたきこわされて暴徒が乱入してきた。ここも阿鼻叫喚の巷と化し散り散りになった。

前日はソ連兵のトラックが先導したのだったが、この日はどうだったのだろうか。一人の男が私に三八銃を所望するので立てかけてあった一丁を渡すと「ついて来い」という。少し行くとその男の三八銃をねらって他の男が追ってきた。前の男は取られまいとして傍らの川原へ走り降りた。私は後を追う男を蹴落としたが川原で取り合いの末、銃は後の男のものとなった。登ってくるなりその銃尻で私の足腰をいやというほどたたくと、元来た道を引きかえしていった。前の男はそれでも我々を離れた畑の小屋に案内し、粟飯を炊いてくれた。昨日からろくに食べていなかった私共にとって、ほんとうに有難いもてなしだった。夕刻ここもあぶないからと城門まで送ってくれた。城内はひっそりとしていた。同僚だった賈成林の家が近かったので寄ると、何がしかのお金と衣類を集め、居留民収容所に案内してくれた。中には昨日の開拓団であろう若い人々が数十人集められていた。

長女は熱が高かったので家族も一緒に病院に入れてくれた。そこには怪我をした若い人が二十人ほど寝かされていた。私は看護をさせられた。寝たまま数日何の反応もない少年の耳からは、ウジ虫が取っても取っても湧いてきた。真夜中、物音で目をさますとそこに人影があった。ぞっとしたがよく見るとあの動かなかった少年であった。

三歳の長女は薬の一包みも与えてもらえずに「パンパン項戴」という切ない言葉を残して数時間後息たえた。私にとって九月十八日は消えることのない悲痛と戦争のにくしみのよみがえる日である。広い湿原の乾いた所をえらび、穴を掘って頭を北の方に向けて土をかけた。

若い連中のけがもなおってきたある夜、月光が窓からさしこんできた。誰ともなく歌が出はじめ合唱となった。思い出の歌は次々とつづき、最後は荒城の月であった。切ない感傷の一時だった。このあと全員、大虎山収容所に送られるが、そこでは赤痢が慢延し子供や弱った人が次々死んでいった。女狩りもひどかったらしく若い女性は断髪男装をしているのだった。

少年兵からの伝言

◆佐野　正雄（77歳）

戦中・戦後の生活●

黒山街にUターンして最後まで留った五家族十五人は黒山病院の一隅で、食べていくだけの必死の毎日が始まるのだった。満人の食べない牛蒡を掘り、うらなり南瓜をさがし、さし入れの粟を粥にして命をつないだ。街は物情騒然とし何時どこで何がおこるかわからない状況だった。街中に出ると日本人とはき捨てるようにまた、時に同情をこめてささやかれた。国共の角逐か市街戦が何度となく突発し、あわてて壁ぎわに溝の中に身を伏せるのだった。そのうち佐野国松さんは病院からがめった薬で獣医の腕を生かしはじめたし、中島猛さんは飴製造所の労務につき、石川さんはある家のお手伝いとして通い、柳夫妻と私の妻とは漿洗房の下働きをしはじめたのである。毎日兵士たちの下着が山と持ちこまれその洗濯に大苦労した。水は離れた井戸から運び、素焼きの黒鉢で洗うのでその能率の悪さは大変なものだった。その見返りに何をもらったのか記憶にも残っていない。私は天秤かついで鐘をたたいて飴を売って歩いたが、荷が減らないで足ばかり重くなる日が多かった。

南棟の五間房子の左側の入口の部屋に、倪大夫の一号夫人、奥隣りの部屋に二号夫人が住んでいた。倪医師はほとんど二号夫人の方にいて床にはいつも麻薬のカプセルが落ちていた。その一号夫人はよく右側入口の部屋に私の妻を訪ねては、筆談し涙を流しながら苦衷をうったえるのだった。寒さに向かうにつれて燃料の苦面は大仕事だった。倪大夫と協力して、放ってあった電信柱をはがしては燃やした。むしれなくなってからは路傍に落ちている石炭のかけらを拾って歩き、編ましてもらったジャケツと引替えに高粱稈をもらったりした。

二歳になる次女は、まだはうこともできずにごろごろしていた。王さんはその慰問なのか、同部屋だった石川さんが目当てなのかわからなかったが、ともかく度々訪れた情報屋であった。ソ連兵が開放した際、殺されたのは誰々と指を折ってあげ、配給のときのうらみは怖い、日本は科学で負けた、銀座や浅草も空襲でひどくやられた、などなど物語るのだった。

混乱した世情の中では日系はもとより、満人もまして満洲国に協力した満系の不安は想像以上のものであった。街でたまたま会った周万鵬元産業科長は深々とわら帽子をかぶり、あたりを気づかって私と話をするのを避けたい様子であった。それでもこっそりと味噌、白酒などを届けてくれた。

ようやく暖かさを増したある日、二人の少年兵が折目正しく入ってきた。甲曰く、自分の父親は何の理由もなく日本兵に殺された。乙も兄と叔父を殺害され、憤りは消えることはない。しかし悪かったのは日本軍であって、一般国民のあなた方ではない。今後は両国どうし仲よくしてゆかねばならない。帰国したら日本の皆さんに伝えてほしいといって固い握手を交わしたのだった。

五月の中旬頃、小さい子供が紙片を持ってきた。その時間に行くと、門でその子供が待っていて奥の又その奥の一室に案内した。そこにいたのは元林務服長の金士祥さんだった。「佐野さん大変だったですね。私も不安の日々でした。近く帰国されますね。自分は何もしてあげられなかったが、今のあなたの服のままでは中国人の恥です。これを着てください」と、こざっぱりした男女の上衣を渡すのだった。そして私の日本の住所を書きとめ、「平和になったら文通しましょう。平和になったら、平和になったら」と念を押すのだった。私はくりくりした彼の目を見、温情をかみしめるのだった。その後四十五年、彼を知る術もない。県の当局から呼び出しがあって、二、三日中に日本に送還する旨申し渡されたのは間もなくだった。

「報暴以徳」在中国の日本人を全員安全に送還する。日本から賠償をとらないと蔣介石は表明したが、その具体化の一つであったのであろう。五月下旬、五家族は人力車に乗せられ黒山駅から貨車に積みこまれ、ともかくどこかへつれていかれることになったのである。途中、駅々から乗りこんでくるのは皆日本人であった。長い汽車の旅だったが、着いた所は胡蘆島だった。道端では魚を売っていた。我々はとびつくように小魚を買い、うろこを取るのももどかしくそのままかぶりつくのであった。

順番がきて船に乗ったとき、ひょっとすると祖国に帰れるんだという淡い安堵感がよぎるのだった。二日目についたのは博多港だった。かつて見た景色が目の前にあった。故郷を実感した。降ろされるや、えり元にDDTをふりかけられ六月二日付引揚証明書を渡され、それぞれの方向にわかれて汽車に乗ったのである。妻の実家に暖かく迎えられたとき、感無量で言う言葉も出なかった。

私、妻、次女、物はただ一個、認印それが引揚一家のすべてであった。

あの年の三月から五月まで—麻布での戦争体験——

◇鈴木久吉（57歳）

昭和十五年に長兄が北支で戦死し、十七年には父が病死し、母が女手一つでたばこ屋を営んでいる麻布区竹谷町に、私が学童集団疎開先の栃木県から帰ったのは昭和二十年三月三日だった。

三人の姉のうち次姉は山形県に工場疎開し、妹は西多摩郡に縁故疎開していたので、家には二人の姉と弟と母が住んでいた。

家に入ると、仏壇の前に座らされて、母から、次兄が前年九月にニューギニア附近で戦死したこと、疎開先での私が悲しがるといけないので知らせなかったこと、二人の兄が戦死したのだから私が家長であることを知らされた。相撲が強くて、トンボやセミとりの名人で、無口だが優しい海軍の整備兵だった兄は、私にとって、誇りだった。

「天皇陛下のために命を捧げた二人の兄は、一家にとって名誉この上ないことであるし、私も大東亜共栄圏建設のため鬼畜米英を殲滅するため頑張ります、疎開先からも帰りましたので、これから親孝行をします。」と修身の教科書のような話をして、仏壇にお線香をあげた。母の感情を推し計るには、あまりに軍国主義の教育に浸った、国民学校六年生の小国民であったと思う。母は私の前では涙を流さなかった。

お雛様の前での晩御飯は赤い御飯だった。私の帰京のお祝いのお赤飯かと思ったら、ボソボソした高粱入りの御飯だった。

三月十日の空襲は、空が真赤になってから仙花園の防空壕に入った。隣組の人が石垣の上の畑に穴を掘って作った、十人ぐらいが座るといっぱいの広さの防空壕の中で、ただただ神風が吹いてくれること、味方の零戦がB29を撃ち落としてくれることを願っていた。やがて、十番のほうが燃えてるけど、竹谷町は大丈夫だと言われた。私は寒さのせいもあったろうが体の震えが止まらなかった。この空襲で下町が壊滅的打撃を受けたのを知ったのは、もっと後のことである。

東町国民学校の私達の卒業式が、いつ行われたか、式次第がどうだったか、当時の同級生に聞いてもよくわからない。ただ〝蛍の光〟も〝仰げば尊し〟も唱わなかったことと、卒

業証書の代りに成績表の後部の〝六年生の全課目を終業……〟という字が終了というゴム印で押されていたのが卒業証書だった。卒業生にとっても感動のない、そそくさと行われた卒業式だった。

中学校の入学式は満開の桜が迎えてくれた。コンクリートの建物に入るのも始めてだったし、新しい教科書、ゲートルの巻き方、教師たちの仇名の教え合い、なんとなく大人びた友だち、歴代の天皇名の暗記、英語、文法などの新しい教科、毎日が新鮮で新発見があり、愉快な日々だった。

五月二十五日の空襲は、そんな学校生活からも引き離された。空襲警報で防空壕に入るとすぐ空が真赤になった。炎が上がりB29の巨大な機影がボーッと炎に浮かび上がる。轟々と響く音は大編隊であるのがわかる。女子どもは避難するように伝令が来る。家の片付けと消火活動をするという姉たちを残して、弟を背負った母と私は竹谷町通りから仙台坂下の松方邸（今の韓国大使館）の門前まで逃げた。門柱のあたりでうずくまっていると、「善福寺に焼夷弾が落ち〝逆さ銀杏〟も燃えている。」と麻布山から逃げてきた人が言う。二の橋、十番の方の炎が高くなって、風で吹き上げられた火の粉が降ってくる。突然ガランガランガシャンという音が響く。焼夷弾の燃えかすの空き缶が落ちる音である。度肝を抜かれる音だ。姉たちを気遣いながら、仙台坂を上る。氷川神社の方で火の手が上る。B29の爆音と機影と周囲の炎に、石塀のあたりでうずくまり、また歩き、現在野球場のある森から南部坂の上の有栖川公園の門にたどりついた。姉たちと落ち合う場所である。四歳の弟は一度も泣いていなかった。時折目を覚まして、まわりを見回し、また寝てしまう。公園の林も炎で黒く浮かび上がる。まわりには、たくさんの人がうずくまっているのに、ただ黙っている。B29に声を聞かれて、直撃弾を落されるのを恐れているようだ。

やがて爆音が消えて、空はまだ赤いが人々が動き出し始めたころ、姉たちが現われた。竹谷町はほとんど焼け落ちてしまったこと、途中まで商品のたばこを運んだのだが、近所の工場の中に置いてきて、その工場ごと燃えてしまったことなど話す。みな黒くすすけた顔で無事を喜び合った。

本村町の叔父の家は、戦火を免れたので、焼け出されたわが家と、竹谷町の三、四家族とが、寝起きするようになった。

叔父の家から職場に通う姉たちを残して、母と弟と私は西多摩郡霞村（今の青梅市）に疎開した。麦畑と雲雀と桑の木と、防空壕のない勉強も学校もない生活で八月十五日を迎えた。

そのあと、朝鮮半島で、ベトナムで、また世界各地で戦争という言葉を見聞きするとき、その戦争下の子どもたちの恐怖感は私の心の中で共鳴する。五十七歳の今になっても。

私の戦中・戦後

◇関根　政治（86歳）

当時私は町内の防空指導員を命ぜられ警戒、警報、空襲警報の発令のつど家を捨て、町内へ飛び出し警報の伝達を自転車でメガホンで知らせる役でした、ある深夜、警戒警報が発せられ屋上の物干し台に立って見張っておりましたら、隣町内の指導員望月さんも同様物干し台にいてお互い懐中電燈で合図し合い怒鳴り声で連絡を取り合ったものでした。

ある日の午前十一時頃、空襲警報が発令され物干し台に駆け上って警戒していると品川方面の上空に敵機らしい二機で哨戒飛行の様子が窺えましたが敵機の去った「あと」「あと」に高射砲の煙が二つ、三つずつ追いかけて行くのがはっきり見えてなかなか命中しないので歯痒い思いをしたものでした。

また、ある日の午後、空襲警報が発せられ急遽物干し台に出て敵機の来襲を監視している時、日本橋方面の上空に開かずの落下傘が急降下始めました。閉じた傘の下方に人の姿が見えましたが飛行機は見えないので余程の高度より落下したものと感じましたが、翌日の新聞にも載っていないし多分日本の兵士ではないかと感じ今でもその時の模様が瞼に残っています。

防空指導で毎日外出の用事に追われているある日の朝六時頃、起きて店を開けようとした所、外のガラス戸に「強制疎開」と書いた半紙が貼り付けてありました。

私の家は二軒長家でしたが隣の「田川屋」という菓子屋でその主人が半年前に出征したので廃業し、田舎へ疎開し空屋になっていました。

区では空襲で大火になるのを恐れ、空屋が出ると目の敵にして強制疎開をさせ立退かせて家を取り壊す方針のようでした。そのため、私の家も傍枝をくったわけで、いや応なし文句の言う所がないので町会事務所へ話に行ったら「お気の毒です」と、一言いっただけで翌日町会より「見舞金」として五円届けてくれました。

誰が断りなしに貼りに来たのか知る由もありません。

それが罷り通った御時世でした。戦争のむごさを感じます。

終戦当日、新橋駅附近の焼野原の跡へ上空よりビラが頒布されたので、通りがかった私の友人が一枚拾って保存していたものですが、それをコピーしてもらい手許にあるので御披露します。

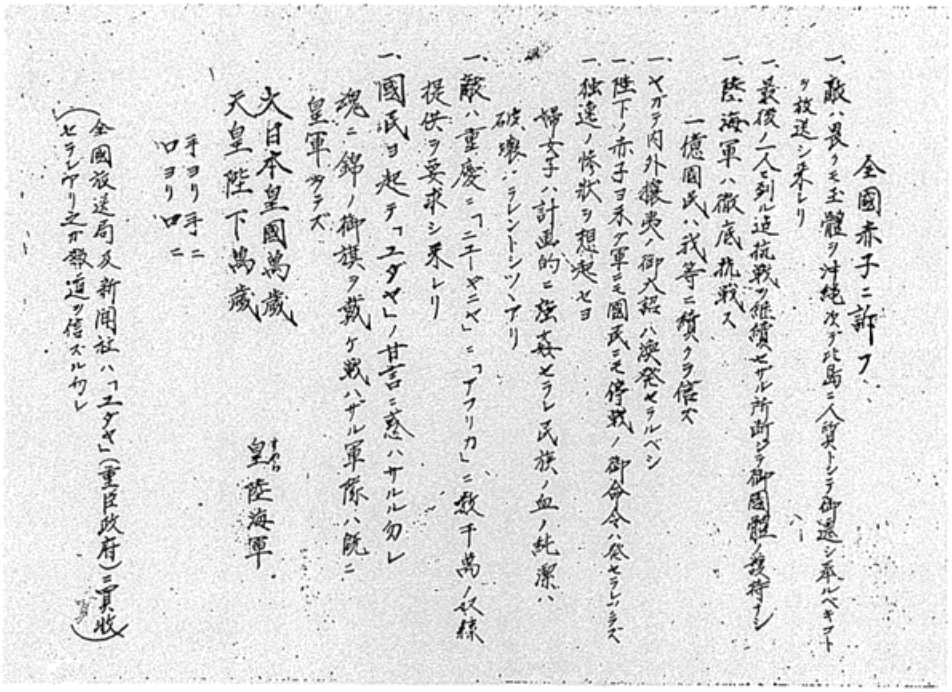
昭和二十年八月十五日終戦ノ日午前中ニ新橋駅附近ニ上空ヨリ投下サレタビラヲ拾フ

終戦の一、二ヶ月後、新橋の焼跡にM組と言うボスの統轄するヤミ市が発生し衣料、食料何でも人が群がり売買の取引が行われたものでした。私も地方から芋やら古着やらを持ち込み一コマ（約一坪）を一日五円で借り、出店許可をもらい商いをしたものでした。

ある日の午後一時頃、進駐軍のトラックが一台ヤミ市へ入って来て兵士五、六人でトラックに満載のネーブルを散布し始めました。人が群がりわれもわれもと拾ったものでした。

群衆の中から「拾うんじゃあないよ　アメリカの謀略で中に毒が入っているかもしれない」「よせ」「よせ」と叫ぶ者が二、三人いましたが、私も一個拾って見たらローマ字でカルフォルニヤと印が押してありました。米軍の戦後の日本人への救恤散布だったのでした。

昭和二十年八月十五日終戦日新橋駅付近に空から投下された



全國赤子ニ訴フ

一、敵ハ畏クモ至尊ヲ汚辱シ奉リ北島ニ入貶トシテ御遷シ奉ルベキヲト
ヲ放送シ来レリ

一、最後ノ人ニ到ル迄抗戦ヲ継続セザル所断ジテ御國體ノ護持ナシ

一、陸海軍ハ徹底抗戦ス

一億國民ハ我等ニ賛クラ信ズ

一、ヤガテ内外環衆ノ御入洛ハ涙発セラルベシ

一、陛下ノ赤子ヨリ来タ軍ニモ國民ニモ降戦ノ御命令ハ発セラレンラズ

一、独逸ノ惨状ヲ想起セヨ

婦女子ハ計画的ニ強姦セラレ民族ノ血ノ純潔ハ破壊シラレントシツヽアリ

一、敵ハ重慶ニ「ニヤーヤニヤ」ニ「アフリカ」ニ数千萬ノ奴隷提供ヲ要求シ来レリ

一、國民ヨ起テ「ユダヤ」ノ甘言ニ惑ハサルル勿レ

魂ニ錦ノ御旗ヲ戴ケ戦ハザル軍隊ハ既ニ皇軍ニアラズ

大日本皇國萬歳

天皇陛下萬歳

皇陸海軍

（手ヨリ手ニ口ヨリ口ニ）

（全國放送局及新聞社ハ「ユダヤ」（重臣政府）ニ買收セラレ居リ之ガ報道ヲ信ズル勿レ）

日本軍部の徹底抗戦のビラ　（提供：関根政治さん）

◇多田佐智子（61歳）
すべてが戦場だった、あの頃

戦中・戦後の生活●

終戦以来すでに四十五年、歴史の歳月を繙（ひもと）いてみました。出征兵士に武運長久の願いをこめて贈る、一人一針の赤糸結びを縫いつけ、千人針と名づけ、町のあちこちに、愛国婦人会、学生が「お願いします」と町の中を歩きました。赤紙一枚の召集令状、ひとたび征途につくとなると、胸の内は複雑に違いありません。お国のためにと兵隊さんは、赤いタスキをかけ、ノボリや、旗を立て歌を唄いながら田町駅、または品川駅迄、送りに行った入営風景など想い出します。戦局は日ごとにけわしく、陸海軍予備学生を志願した若者は学鶯（がくわし）と呼ばれ特攻隊員となり、お国のためにと、二度と帰らぬ戦場にと飛び立ちました。隣近所の若い男の人達は次から次へと軍隊に動員されました。小学校四年生の時でしたが、綴方（つづりかた）の時間に、「兵隊さん、御苦労様」と慰問文を書きました。先生が検閲し、封をしました。誰の手に慰問文が届いたことか。

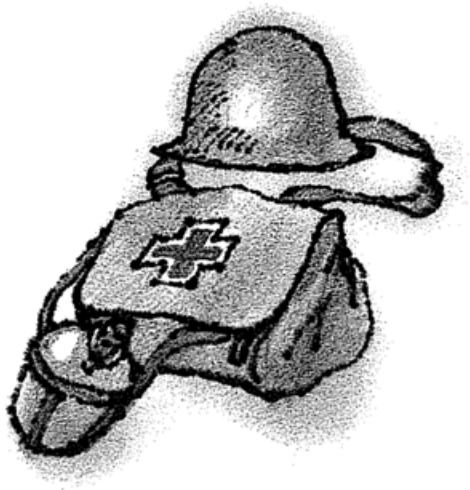
空襲があったとき、焼夷弾による延焼防止並びに生産資材の確保のために、建物の強制疎開が始まり一軒一軒、家がとり壊され、住みなれた家を離れて、他に移動する人のことを思うと一抹の不安とさびしさを感じました。京浜国道の田町駅から、品川駅までの省線側の家は、とり壊され、私の家からも省線の走る姿が良く見えました。白い建物は黒く塗りつぶされました。戦時体制下にあっては、すべてが戦場でした。毎日警戒警報、空襲警報と、ラジオで状況を知らせるアナウンサーの声がいやに耳につき、電灯の笠や窓には黒布をかけ暗い電灯の下で着物をほぐし、防空頭巾、もんぺを縫っている母の姿を想い出します。もんぺには住所、名前、血液型を書いた布を縫いつけ、足には、いつもゲートルを巻き床に着きました。火の用心、回覧板、配給とすべて隣組を軸にして行なわれました。十二歳から二十歳までの女子は女子勤労挺身隊に動員されました。私も学校から近くの日本電気に巻線工として勤労奉仕で働きました。当時十五歳でした。

学童疎開が始まりました。空襲をさけて母が弟（七歳）を父の郷里、群馬に疎開させて帰るとき、泣いて畑の中を、ハダシで後を追ってくる我が子に「元気で体に気をつけて、必

ず迎えにくるからね」と指切りし、子は、小さくうなずいたが、母は後髪を引かれる思いで帰ってきたのです。汽車の中でこの事を思うと涙が止まらなかったと、言葉もうるんで話してくれました。

昭和二十年五月二十四日、夜の空襲は忘れる事は出来ません。二度と戦争はいやです。強い風が吹いていました。こんな日に空襲でも、あったらと不安でした。ラジオで「東京地区に向かう」と、空襲警報がでました。B29の編隊が巨大な真白な胴体に真紅の焔を反射させて、焼夷弾を東京の空にパラパラ投下し、手の届きそうな低空で嘲笑するかの様に轟音を残して頭上を飛んで行きました。また一機と、低い空で乱舞していました。尾の翼まで真赤に見え、悪魔の翼でした。強風が熱風となって地面を走り抜けて行きます。空は赤く、火の粉をよけ、水筒の水を口にふくませながら、煙と火に追われ難をのがれるのが精一杯でした。無我夢中で、亀塚公園、増上寺と、一夜中逃げまくりました。空襲警報解除の知らせに、ホッと空を見上げると、夜が明けておりました。家に着くと、焼け跡にバラバラに逃げた家族が待っていました。みんな顔はうす汚れ目は赤く血走っていました。家族の安否を、お互いに気づかい家族がそろった時、どこの家でも、「よかった」と一言、言葉をかけあいながら抱き合って泣きました。

その時、金杉橋附近に爆弾が落ち大変だと話を聞きました。いってみましたら、金杉橋附近には、男女の区別もつかない程、黒くこげた焼死体が折り重なり、こげくさい異様な、においがしました。爆弾の恐ろしさに足がふるえました。芝浦のガスタンクの近くにも爆弾が投下された話を聞きました。私の同級生も焼夷弾で負傷しました。戦争を、二度と繰り返してはいけません。戦争という二字を忘れてはいけません。戦争の悲惨さや平和の尊さを時代をこえて、次の世代に語り継がねばなりません。



戦後の暮らし

◇多田佐智子（61歳）

終戦以来すでに四十五年、忘れもしない。昭和二十年八月十五日、正午に放送を聞くために、近くの御田八幡神社に隣組が集合した。天皇陛下自ら放送なさるという。天皇陛下の肉声を聞くのは初めてだ。「何事だろう」と人々は、ささやきあった。ラジオの前に聞きいった。私には良くわからなかった。両親に「どうしたの」「なんの放送」と、たずねた。「今、敗戦の宣言文を読んだのよ。」、日本は戦争に敗けた。私は、悲しさと、嬉しさが、ごっちゃになったような感じがした。真夏の太陽の下で蟬の鳴き声だけが耳に残った。

戦後の暮らしを振り返ってみたいと思う。

焼夷弾の雨に逃げまどった人々は、知恵をしぼり防空壕を住居に、また、バラックを建てる人、雨露をしのげれば十分だった。空腹の明け暮れだった。雑炊食堂の前には長い行列を作り、玄米のおかゆを買うために並んだ。米粒もかぞえる程しか無く、水の方が多かった。口に入る物なら、なんでも食べた。フスマの入った小麦粉の団子汁、すいとん、じゃがいも、さつまいもが、毎日の主食だったが、ごく僅かだった。果物以外のすべての食べ物に、火を通して口にする習慣をつけられた私達。ガスが無いため、朝早く起きて、木片や、枯れ枝を、燃やし、七輪で炭をおこし、母は毎日の食事の準備をした。ふすまの小麦粉を、木の箱の簡単なお手製の電気パン焼器で焼いたり、鉄かぶとの中でとうもろこしをいためたり、家の裏の土手の蕗など、食べられそうな雑草を何でもたべた。一汁一菜の生活だった。両親が水を飲んで過ごした日を私は何回もみた。夜なべ仕事に、一升瓶に入れた玄米を棒でつつき、二時間程つくと、七分づきになり、どこの家も米つく音のわびしさが胸にしみた。玄米は、もそもそして食べられなかった。

また、農家に食糧の買い出しに、足が棒になってしまいました。やっと手に入れた一升の米、じゃがいも、一個のにぎりめしをもらった。一口食べた時、米粒の味をかみしめ、家に帰っておもゆにして、家族でたべようと、リュックの下に入れた。田町駅に着くと警察の手入れに持って来た荷物を取り上げられ、悲しさに泣けてきた。生きて行くためには、自

給自足しかなかった。トマト、キュウリ、ナスと、バラックの前で、一家で野菜作りをした。

石鹸もなく、頭の毛から、衣服の縫い目に、ノミやシラミがたかり、かゆくて、あちこちで頭をかいたり、背中をかいたりしていた。

眠れない日が続いた。

そして、シラミの媒介による発疹チフスが全国的に流行し、区役所等の方々がDDTの散布にきた。頭、襟元、袖口等から全身に白い粉をかけられた。大きなドラムかんのお風呂に隣組全員で、順番に入った。お風呂に入れる日は嬉しくて、少しでも、かゆみがとれるのではないかと。

また、おなかがすくと、一番たべたい物の絵を紙きれに書いた。三角を書き、まんなかに、鉛筆で点々といれた。ごまのおむすびを、のり巻き、せんべい、菓子と、片っぱしから書いて、紙の上に指を当て、食べたふりをした。絵で代用するほかには、頭で考えた解決策がなかった。身ぐるみはいで食糧にかえる、タケノコ生活を支えたのが、ヤミ市だった。

疎開の子供達が引き揚げて来た。待っていたのは、焼け跡だけだった。家が焼かれ、両親の生死も知らぬ子供たちは戦災孤児と呼ばれ、東京の空の下に何人いただろうか、住む家もなく浮浪者の群れに……。

激動の昭和の歳月だった。戦争を二度と繰り返してはいけない。忘れまい。

この悲惨な体験を心に深く刻み、平和の尊さ、大切さを次の世代に語りつがねばならない。

永遠に築こう、自由と平和を。

（港区教育史資料）

戦後の社会復興について

◆田高　勇一（87歳）

会社は八割位で陸海軍用の通信機を製造しておりましたので、終戦と同時に閉社の状態でした。退職希望者以外は、月収の六割支給で今後六ケ月の間を待命期間とする、と会社側から発表され、私は六割支給では生活が出来ないので、鶴見の日産自動車の焼跡にあるアメリカの工兵隊の労務者として働く事にしました。主な仕事は焼跡に彼等の兵舎（カマボコ）の建設や、または大型軍用車のパンク直しの手伝いでした。

大型貨物船が毎日のように入港し、岸壁は材木の山でした。寒い時は板厚六十ミリメートル、長さ三メートル位の立派な材料をどんどん燃やしていた我々は、薪がないので困っていた時だけに、昼の休み時間には帰りに持って行くのに都合のよいように材木を切り束ねて置きました。ゲートを出る時には何も言われず、お蔭で燃料には大変助かりました。その時に、アメリカは物資の豊かな国だなあと思いました。

待命期間も過ぎて会社に戻り、今度は倉庫の係員として働く事になりました。仕事は続けて倉庫内の部品の調査や台帳を新しく作ることでした。六ケ月位経て台帳がようやく出来ました。一番苦労したのは単価を入れる事でした。その後は部品購買の係長となり、外註品の単価見積り購買の仕事を始めました。また多数の従業員の支援により、第二期目の労組の書記長に選ばれました。地方の豊橋、栗橋、岡谷等八つの工場は全部閉め、売りに出され、余った部分品や付器類は全部川崎工場に集め、それぞれ業界の人達に頼り処分してもらいました。入金に付いては会社側代表者総務部長、従業員側代表私にて善く話し合って会社側に入れるか、従業員の給料に回すかを決めました。給料の支払いといっても十パーセントとか二十パーセント程度で、お互いに生活には大変に苦労しました。また会社の復興のための資金面で面倒をみてもらえるようにと、組合員の立場から関東地区住友銀行のお目付役と言われる人のところへ、組合委員長と私書記長で丸の内の事務所まで出掛けました。銀行側の言い分では、東通さんの経営者は努力が足りないとか、力がないとか、説明を聞かされた事がありました。組合側では銀行で信用して頂ける様

に全員一生懸命に頑張りますので、何とか面倒をみて頂きたいと御願いして帰りました。

昭和二十二年の秋には組合指導のため、GHQのレーバーセクションから二人の女性指導官が組合の事務所に見えまして お話を始めました。主任の方の名はよく覚えていませんが、ネルソンと言われたように思っております。挨拶を済ませ蒸しタオルを出しましたら大変に喜んで、日本人は大変に清潔であると言われました。そして主任から『タバコ』を一個頂きました。私はタバコを呑みませんので、そのまゝ作業服の胸ポケットに入れました。後で他の人に聞いたのですが、アメリカでは、その場で封を切り口にするのがエチケットであると教えられました。また主任は組合幹部の給料はどこからもらっているかと聞かれました。私は今組合には金がないので、会社側からもらっていると話しました。なるべく早く組合からもらうようにして下さい、と言われました。その後は焼残りの工場を案内し、作業しているところを見てもらいました。工場では今、ゴムタイヤ又はベニヤ板用の高周波乾燥器を製造していると話しますと、私もアメリカで高周波利用で歯の治療をした事があると話されました。その後数日たって東京の新橋（元フロリダダンスホール）レーバーセクションを訪れました。受付には日系中尉がいて、仕事の内容を丁寧に話してくれました。その後は組合の大会には客人として出席して頂きました。指導官の人達は元アメリカ組合の幹部だった人のようです。

組合の集会届の方式が変わり、今度は横浜の憲兵隊を経て所轄警察署へと逆になりました。書類は三通、昭和二十三年秋には会社から再建計画が出され、五十歳以上の人は退職してもらう、今後は六百人位で再建したいとの事でした。その頃の労組は力もなく会社側でも倒産寸前の状態でした。しかし労組としてこれをそのまま呑む訳には行かないので、組合では年令の高い人は生活の責任者であり、また仕事を捜すにも若い人より困難であるとの見解にて、退職金の問題を含めて退職金の一律支給でなく、勤務年数も考慮してもらう希望退職の方式を会社側に申し入れ、数回団交の結果組合側の線で妥結しました。

その後総務部長から私を見積課の責任者として頑張ってもらいたいとの話があり、もし会社が倒産するような事があった時には、君の給料は工場長と総務部長が絶対責任を持つとの事で、その後も何回か話はありましたが私は賛成しませんでした。理由は簡単で、私は技術屋のはしくれで購買や原価見積りには関心がなかったからです。昭和二十四年私は少額の退職金をもらって退職しました。

第二次世界大戦の工場内体験記録

◆田高　勇一（87歳）

戦中・戦後の生活●

私は昭和三年に二十四歳で芝区西應寺に本社のあった東洋通信機（株）の無線部現場に入社しました。私は無線関係の仕事をした経験がありませんでした。たぶんラジオの高級品のような機械の部分品でも造るのだと思っておりましたが陸軍の飛行機用の重い鉛玉が五つぐらいついたアンテナを操作するレバー把手（とって）の製作でした。高級な仕事で大変に張り合いがありました。その当時は外国に比べて大変に遅れていたのでしょうかドイツの機械を陸軍で購入しそれを参考にして下請会社で設計をするという状態でした。

満洲事変支那事変日獨伊同盟を契機にして第二次世界大戦へとエスカレートし、会社の仕事も日増しに多くなり、私は昭和十四年秋には海軍関係送信機組立配線工場の工長に選ばれました。工場は六組に別れ総員は六十名程でした。昭和十六年の春には川崎市の塚越というところに大きな工場が出来、ここに私達は引っ越しました。この辺は南武線の沿線で通信機を造る大会社が並んでいました。東芝の堀川町工場、柳町工場、東洋通信機、帝国通信機、日本電機玉川工場富士通本社、並びに工場、日本通信工業です。戦争が拡大するにつれ会社の規模も大きくなり、川崎工場を主に豊橋、岡谷、栗橋、等、八つの地方工場が出来ました。川崎工場（全社では一万人以上従業員がいた）は陸軍部海軍部と二つに分かれ、海軍部では艦船課と航空課になり、それぞれ生産に励みました。

工場は軍隊様式となり、会社名はなくなり東部〇千〇百〇十部隊と呼ぶようになりました。階級章も出来、社長から一般従業員までそれぞれ階級章を胸につけるようになりました。

仕事始めのサイレンがなると、天気の日には、各職場の都合のよいところに集合、人員点呼の後、各職場の責任者の訓示または仕事上の話等があり、終わってから作業掛かれの言葉によって仕事を始めます。私は軍隊の経験がありませんが、職場には経験者が多くおりましたので、経験者の指導を受けて勉強しました。会社内には防諜（ぼうちょう）のためか憲兵が常駐（じょうちゅう）しておりました。

冬季でもストーブはありましたが燃料がほとんどなく、学徒上りの将校が大勢いるので、その間の若い人達が先に立って、天気の日には会社から一キロメートル位離れた畑の真中にある村市の神社まで手を振って駆足です。神社のお参りが終わると元の道を元気に駆足で戻るのです。これは強制ではありませんが若い人は男も女も多く参加してくれました。これを行う事で大変に体が温まりました。

現場は二部制になっており、昼の番は午前八時から夜七時まで、夜の番は午後八時から翌日の午前七時まで、私は交代してくれる上司が休みの時は、二日夜勤をする事がありました。夜番にはストーブ一台について薪一束と石炭小箱に一ぱい約五キログラム位が割り当てられますが、燃料の配給がない日も時々ありました。私共職場では、工員の健康や製作の能率化を考え独断で、夜勤者は午前三時から五時まで仮寝(かみん)をしてもらいました。もちろん、この事が憲兵や監督上司にわかれば、私が処罰されます。私は処罰は覚悟しておりました。しかし私は上司や監督者に充分に理解してもらえる材料を持っておりました。非常の場合、形式ばかりにとらわれず実を取る事も必要であると私は常に考えておりました。

戦時下の各大臣や政治家並に陸海軍の指導的立場にあった人々は、勤奉隊員や地方からの徴用工員に付いてどのように考えていたでしょうか。私の場合を言えば、多くの人達を配員されて材料の不足のため大変に苦しんだ一人です。

これらのことは最上級の人々にはわからないと思います。

動員されて来る人達は、一生懸命仕事をして国のために少しでも協力したいという気持で職場に来るのですが、職場に出て見ると仕事がない、これでは気持が挫折してしまうでしょう。こんな事なら、なぜ動員したのかと憤りさえ感じるでしょう。一番近くにいる私は、何とも申訳ない気持で一杯です。大幹部にはこのようなことは、わからないのです。もし私共が大幹部に話をすれば、これが戦争だよと言うと思います。大会社や大企業の経営者の中には、戦争になれば色々な点で政府の援助があり、戦争成り金の夢を見た人も相当にいた事でしょう。

私は仕事の出来ない時には、工場長の許可を得てコッペパン一ケ、梅干一ケの弁当を食堂で作ってもらい、屋外訓練の型式で四キロメートル位離れた鶴見の三つ池まで行きました。三つ池ではボート遊びも出来、近くには自然の栗の木や緑が一杯あり、公園ではありませんが多勢人が集まっておりました。帰りは会社の門が閉まらないように充分の余裕を見て帰るようにしました。

また、私の一番心配だったのは、横浜刑務所から入獄者の割り当てがあり、私の職場へは男六名でした。どのように指導したらよいか心配でした。面接は労務係と私でやりましたが、全部が真面目のような感じを受けました。一ケ月ほど経てから寮内で物がなくなり、秋田の母が病気なので見舞に行きたい等の嘘を言って仕事を休む、また、寮内での泥坊で六名全員警察をへて刑務所へ帰りました。

若き日の記録

◆田所　久（76歳）

三月十日焼けました

一九一四年第一次世界大戦はじまる。

その年私は生まれた。のどかな平和の小学校三年九月関東大震災が東京を焼土と化した。

昭和に入ると不景気がじわ〳〵と寄せて来た。

一九三一年満州事変おこる。つづき五・一五、二・二六事件、日中戦争に移る。不況と不安の社会はこの頃より第二次世界大戦の兆があった。私の結婚話が赤坂の料亭で行なわれた。この席で、この料亭で、二・二六事件の兵士がたてこもった話題が出た。約二年前でようやく料亭は再び開くこととなれたとか、二・二六の当時私も事件にまきこまれた民家民衆は大勢麹町通りへ逃れて来た有様は忘れられない。

昭和十四年挙式後靖国神社の通りの一隅に居を定めた。

昭和十五年長女誕生、昭和十六年太平洋戦争、昭和十七年米機日本空襲、B29本土空襲十九年は激しくなった。発表の戦果とうらはらに何もかも欠乏して来る。日本橋の店も、綿糸統制で閉め、夫は医局院に勤務したが、次に徴用士として日比谷新潟鉄工所に勤務、十九年末に出征令状によって昭和二十年一月五日入隊となる。兵役二十歳の時体が弱く丙種兵隊不合格だったが、三十六歳の年令も体質も徴兵は紙一枚できめられた。出征前に出産を控える私親子のために自宅の六畳の床を掘り、防空壕をほってくれた。

出征後日夜の空襲は隊を組んでB29が飛んでいる。残された女も年寄りも間引疎開のため近所の家々をこわすことになり、その仕事にかり出される。

予定日より一ケ月早く次女出産、産湯に一度入れていただき、退院まで一度も入れない。

毎日の空襲で地下室に逃げ込んですごした。病院だった。ベットの上で戦地の夫に慰問袋をつくり、出産の通知をする。富山の知人の所へ疎開せよと返事が来る。院長先生はじめ、皆さんゲートル巻で回診、十五日目に退院した。家の壕はこわくて入れない。貴重品を瀬戸火鉢につめ、ふたをして土をかぶせ壕をうめてしまった。二月に入ると益々激しい毎日が続いた。

黒ずんだ煙で夜の近いような、どんよりした日中だった。東京はどこかが燃えている。青空はない。三月九日、いつもとちがった警備の乱れ声が飛ぶ。あわただしい気配に逃げ出すことにして、赤ちゃんを毛布巻にし自分の体に子供ふとんで巻きつけた。押えのおぶい紐の、結び目を長女にしっかり持たせ、子供の下げカバンに、はき物を入れてやってたびはだしで逃げた。大通りは人気が少ない。メラ〳〵、ユラ〳〵火の玉が盛んに音もなく落ちて来る。避けながらウロ〳〵行手をさがす。当てがない。大通りの壕に入ろうと思っても恐ろしくて入れない。兵隊が一人いた。

「連れていって下さい」と叫ぶと靖国神社の土塀の所へ連れて行ってくれた。人がどん〳〵出て来る。行手なく四方が火の海、神社の塀に集まって来る。火の粉が空いっぱい、風に飛ばされて飛んで行く。前の通りの民家は、はじから、はじまで燃えている。警備員が私達親子だけ、神社の境内に入れてくれた。人はいない。

一ケ所でたき火をしている場所がありそこに連れられた。「暖まりなさい」と言ってくれた。森がこんもりして灯は一つも見えない。たき火の囲りに五、六人の人がいただけだった。まっ暗の神社の空は火の粉が盛んに横に流れるように北風にあおられ飛んで行く。暖まって神社の塀の所にもどった。よそのおじさんがおぶせてくれた首のすわらない赤ちゃんなので首を外向にして私の背と赤ちゃんの背と合わせておんぶさせてくれた。薄明るくなって来た。総ての赤かった天地がだん〳〵曇天のように白ずんで来た。朝の日が昇る。黒い丸い型の日が上っていく。すすもやの焦土ケ原はくもりではない。すす煙がたちこめている焦土なのだ。黒い日がだん〳〵上っていく。

はてしない焦土、何のすべも無い人々は会話などない。となりにいたグループは町会長さんの大家族なので米のたき出しをはじめた。にぎり飯をたべはじめた。お嬢さんが私に一つ下さった。他の人にはあげないのに私に下さった。うれしかった。

その中、母と長兄が私を探し寄って来て兄は泣いた。

母宅も毎日の空襲で近くまで、焼けて来る。軍服の主人が突然来た。家族が死んだらしいというニュースで軍隊が、二日休暇をくれ四十度の熱を押して、また、シラミだらけでゴツ〳〵の手足、その軍隊の苦役が人間を全部変えてしまっていた。「只今帰りました」とふしくれ立った両手をついて私に座して頭を下げた。まるで違った人となって会話もない。二日後四十度の熱のまゝフラ〳〵帰隊したが軍隊につくとすぐたおれて病院に入れてもらったそうだ。それによって命はすくわれた。

兄の出征

◆中井　春子（63歳）

ヂリヂリと焼け付くような太陽を背に受けながら今日も田の草取りをする。後二ケ月足らずで入隊しなければならない兄と二人で、お湯のようになっている田圃（たんぼ）は稲のために良いんだと父から教えられた。濃い緑色の葉先は針のように茂っていて時には目を刺す事もある。顔は汗と涙と泥でいっぱい。こんな大変な思いをして作ったお米は、大部分供出しなければならなかった。人の良い父は、作付け面積の少ない家の分まで供出していた。米だけではなく果物までも出していたようだった。

今年の収穫期には兄はもういない。我が家で最後の男子四人目の兄も兵隊に行かなければならなかった。残されたのは年老いた父と女ばかりの四人。昭和十九年の十月、この年の兵隊が最後の現役兵となったのだが、そんな事はゆめにも思わなかった。私達は日本は必ず勝つと信じて疑わなかったから……。やがて入隊の日が来た。村中から天神様の境内に集まり村の役員の人達が決まり文句の激励をしていた。私はたまりかねてその場にしゃがみ込みハンカチで口を押さえ、声を殺して泣いていたのを今でも忘れられない。兄は間もなく中支に送られたのだが、入隊の時手紙を出す時間もなかったらしく、駅のホームで中学生に頼んで出してもらったと後になって兄から聞いた話だが、手紙にはこう書いてあった。「泣くな、本を読め、勉強しろよ」。私はこの兄の影響もあってよく本を読んだ。山梨は果物王国といわれ、私の生まれた育った峡西地方も果物の宝庫であるが、まだその頃は果物を作る家は少なかった。蚕（かいこ）と米作りに頼っていた私の家も、養蚕に果物そして米作りとこの三つを行っていた私の仕事は何時も草取りだったのでよく本を持っては田畑に行っていた。

そんなある日、父が誰に聞いて来たのか兵隊さんが勤労奉仕に来てくれるそうだと言ったので私たちもほっとしたが、それは実現しなかった。村によってはそんな事もあったのかもしれないが、学生の勤労奉仕は当たり前だったが、兵隊までが農業をするなんてと半信半疑でいながら、それでも戦争に負けるとは思っていなかった私達であった。私たちは徹底

した軍事教育を受けた世代で、わかるはずもないのだが。

昭和八年に小学校一年に入学し、国語の教科書が変わったのもこの年であり、昭和一桁生まれの悲劇でもある。衣料の切符制度がいつごろかは覚えていないけれど一番不自由をしたのが木綿の白生地だったように思う。そのため我が家では綿を作り、白生地に替えてもらえるというので仲買いの人に頼んで沢山の綿を渡して生地の来るのを待っていたがなかなかこない。そうこうするうちに仲買人がやって来て工場が空襲で焼かれて生地も駄目になったといって来た。結局、父がだまされたのだった。

あの当時は何もかも「空襲でやられた」といえば事はそれですんでいた。仕方なく私たちは父母の古い着物で仕事着を作ったのだが紬やセルなので仕事には向かなかった。この時紬ほど弱いものはないと初めて知った。一方、女学校ではナギナタをやらされ、学校は工場になった。歌にも歌われた七つボタンは桜に錨、その予科練の服や靴下の繕いをさせられたものだった。

農村地帯で生まれ育った私は特別に困ったということはなく、空襲にあったといっても一度だけ機銃掃射の音を身近に聞いたぐらいで比較的のんびり過ごして来たように思う。しかし四人の兄の内二人も戦死したので、それなりに悲しい思いもしたが、日常の生活は都市に住んでいた人ほどではなかったかと思う。

（港区教育史資料）

学生服での入隊

◇西村　正次（66歳）

私の母が小学校三年生の夏に病死したため東京の叔父に引き取られました。そして市立高輪工業の機械科に入学いたしました。何分居候のことゆえ叔母と折合いがわるく二年生の終り頃になって夜間部に転校し、現在の芝四―一二番地附近の青写真屋に住込みで勤めました。

会社は第一京浜の通りに面していて私の部屋は二階の窓側でした。支那事変が拡大し続々と兵力が増強されつつあったある寒い真夜中の事でした。たしか麻布三聯隊の将兵だったと思いますが、四列縦隊で銃剣を真白い包帯で巻き軍歌を歌いながら堂々と行進をしていました。私は友人と二階の窓越しにその様子を眺めておりました。先頭が芝浦口にさしかかった頃全員が銃を高々と上げ、異様な声を出していました。あの時のあの声はなんだったのでしょうか、再び内地へ戻る事のない悲痛な雄叫びであったと思います。

先日、軍用船が出発した芝浦へ行って見ました。まだ運河は残っていましたが、まわりの環境もすっかり変りゴミの運搬船がつながれていました。あの当時はコピー機がなかったためその役割を果していたのが青写真です。陽画といってアンモニアを使って複写する方法もありましたが、ほとんど青写真の方が利用されていました。私が受け持っていた企業にヤナセ自動車、日立製作所、日本機械等がありました。自転車で毎日々々訪問し、注文をとってまわりました。

当時の国鉄浜松町駅は丸太を組あわせたおそまつな駅で、現在の駅とは雲泥の差があります。駅の前側、現在の貿易センター、モノレールの発着所附近は日立製作所の軍需工場がありました。高輪工業学校（現港高工）は高輪二―一四にあり、現在は都営住宅になっています。その学校へ毎日芝から歩いて通学しました。たしか市電の乗車券が七銭だったと思います。学校の売店でトーストパンがジャム付で二枚が十五銭でした。みんな腹がへっていた時代ですから先を争って買い求めました。同級生や先輩達の中には予科練や整備兵に志願して行った人もたくさんいました。入隊者を肩車にのせ、ワッショイ、ワッショイと勇ましい声を出しながら品川の鬼子母神へ行った事もありました。その予科練へ行った人達

は、ほとんど帰ってきませんでした。

先日校門で尊い命をうばった学校がありましたが、当時は生徒が自主管理をし、校門に必ず二名が週番という名入りの腕章をつけ、遅刻防止を行いました。夜間部ですから随分と遅い人もいましたが、先生は文句も言わず、励ましの言葉をかけていました。

三年生の頃、太平洋戦争に突入、軍事教練も日増しに激しくなりました。千葉九十九里浜での夜営や池上本門寺までの行軍等、記憶に残っています。

昭和十八年十月十八日神宮競技場（現国立競技場）で学徒出陣壮行会が行われ学校全員が参加し、スタンドから激励をいたしました。ちょうど小雨が降り、靴から水がしみこんできた事を覚えています。出陣する者も見送る者も興奮し、異様な雰囲気でした。そして我々も十二月に繰上げ卒業になりました。私は東京ガスに入社し、工務課に勤務いたしました。仕事は設計図のトレースや雑炊とり等でした。十九年の四月頃、六浦工場へ派遣され徴用工の監督にあたりました。時々海軍の水兵さんがタールをとりにきておりました。特殊潜航艇の表面に塗装するためでした。みんなで掛声をかけながら押上げポンプを操作したこともありました。戦局もだんだんと厳しくなり、食糧品もほとんどが統制になりました。砂糖のないコーヒーが九銭でした。

昭和十九年の十一月に現役の入隊通知書がきました。豊橋の騎兵二十五聯隊で、すでに本隊は渡満し、当時北支の帰徳に駐屯（ちゅうとん）していました。その関係で大阪市内の中部二十二部隊に仮入隊をいたしました。私も日大の夜間部へ通っていましたので学生服のまま入隊いたしました。

従って日大の先輩が親切に面倒を見てくれました。二十二部隊は六十二師団の管轄下におかれていました。「俺達はもうすぐ沖縄へ行くがお前達は北支だ、お互いに頑張ろう」と言われた事が今も耳に残っています。先般、沖縄国体であちらへ行った際、摩文仁（まぶに）の丘に立つ六十二師団の碑におまいりしてまいりました。

十二月一日の真夜中に大阪を出発し、下関から釜山へ渡り、約十日間の後に原隊へ到着いたしました。途中、山海関をすぎた頃、敵の襲撃をうけ、六名の方が戦死をされました。一期の検閲が終わると同時に予号作戦が展開され、三月一日に老河口攻略の作戦命令が伝達され、騎兵四旅団は行動を開始いたしました。老河口では多くの犠牲を出しましたが、私は幸いにも司令部護衛にあたっておりました。四月初旬、教育隊へ入るため後方が下がりました。教育中、終戦を迎えまぐるしい時期を無事に終了しました。

変わり果てた六本木の街

◇羽山　公（65歳）

昭和二十年五月の空襲で六本木一番地のわが家が焼けた時、私は日本にいませんでした。遠くシンガポール（当時の昭南島）の三井物産に勤務していたのです。留守宅には母と姉がいて、女世帯で恐らく着のみ着のまま焼け出されたのではないかと心配しました。やがて本社から家族は無事に知人宅へ疎開したと知らせが届きホッとしましたが、その頃から私の身近も慌ただしくなりました。広島に続いて長崎にも落とされた特殊爆弾のこと、終戦一週間も前から日本は降服すると秘かに短波放送を聞いていた現地人が噂しあい、私たちを見る目が変って来ました。後で知った事ですが、無傷の南方軍が何万というシビリアン（民間人）を抱き込んで徹底抗戦しようと画策していると知り、民間企業の上層部はいち早く当時沼池だったジュロン地区を開拓し一大キャンプ（捕虜収容所）を短期間に作り上げ、シビリアンを結集させたのです。乗り込んで来た英軍がこのキャンプを守備してくれました。軍と切り離していち早く自主キャンプを張ったシビリアン上層部の決断と実行力は今思っても胸が躍ります。

さて、このキャンプから送還船で帰国したのは翌年四月、私二一歳の春でした。罹災の模様は母と姉からこもごも聞いたので、自分がその場にいたような錯覚を起します。私の家は六本木一番地の奥で南北に伸びた高い石塀（三河台との境界線、この塀は今でも残っている）に添って建っている四軒の中にあり、その先はこんもりと大木の生い茂る照宮様のお邸でした。北から二軒目がわが家で、私はここから麻布小学校へ、兄は麻布中学へ、上の兄は慶応へ通いました。姉は神戸女学院の寄宿舎に入っていました。上の兄は卒業後神戸の企業に就職して家を離れ、下の兄は昭和十八年入隊して数ケ月で戦病死しました。私は最愛の兄の死を予知したように座して待っていられない気持に急かされて十七年十一月に昭南へ飛び出したのです。

それまでは私の人生で最も平穏な充実した時をここで過しました。表通りはゴトウ花店、石渡糸店、誠志堂、子安薬局、青野和菓子店（が今も健在）、オリエンタル帽子店、コクテル堂が市電通りにあり、一歩裏へ入ると静かな住宅地で

した。六本木の地名となった六本の大木はすでに三河台の角に残る一本だけになっていましたが、これも空襲の目標になるというので切り倒されたと母の便りで知りました。六本木から溜池へのなだらかな坂は、今は高速道路が覆いかぶさり見る影もありませんが、六本木交差点は七階建の銀座三越と同じ高さで、当時は坂の上から三越が見えました。一連隊、三連隊が近くにあり、お陰で昭和十一年の二・二六事変の時は相当な緊張感がありました。当時の住居は材木町一番地、六本木警察署の裏通りになります。この冬は寒く積雪も多くて、私たちは前の坂でスキーをしたり風邪をひいて枕を並べて寝込んだりしました。二月二六日は早朝から大人たちの異常な興奮が乗り移って訳も判らずハシャイでいました。小学校は休校でした。ちょうど長姉が子供たちをつれてロンドンから帰国し山王ホテルに泊っていたので、父は心配して他のホテルに移すため雪の中を半日奔走し、このため父は肺炎となり一ケ月後に亡くなりました。

昭和二十年五月二十五日青山から燃えてきた火をわが家で喰い止めました。その前に照宮邸を守るため周囲三百メートルの人家が取り壊され、わが家の南側の二軒も壊され、中央路の突きあたりにあった六本木荘もすでに無くなっていたそうです。これはいくら説明されても想像もつかない光景です。家族を疎開させた独身男性が残った家々に下宿していたらしく、わが家に火が移った時に思い掛けなく大勢の男性が現れ家財道具を持ち出してくれたそうです。私が帰国した時、戦災に会ったとは思えない程の家財が残っていて驚きました。箪笥、本棚、文箱、ミシンから美術全集まで。戦災の火は数日燃え続け、その火で炊事していたのだと事もなげに語る家族の顔をあきれて眺めていたものです。数日後知人が大八車を引いて見舞いに来てくれたので金町に移り、後に終戦によって取り壊しをまぬがれた市川駅前の家に落ち着いたのです。

私は十五年に西麻布にしばらく住んでいましたが、歓楽街と化した六本木界隈が静かに清潔になるのは正月三が日だけ、干涸びた雑然とした町になってしまいました。ガタピシのせまい舗道を超モダンな女性が飛石を伝うように歩いてゆく、なんともアンバランスな町になりました。が一歩三河台から鳥居坂へ入るとタイムスリップします。東洋英和、照宮邸、岩崎邸そしてガス灯。この道を愛して夏の夕べ十番へ散歩に出かける一家の姿が見えるようなのです。亡き母、亡き兄たち、姉に少女の私の姿が。

東京も激戦地だった

◆久松　安（80歳）

戦中・戦後の生活●

昭和十六年十二月八日ハワイは日曜日の早朝であった。海軍中将南雲忠一の指揮する空母四隻を基幹とした機動部隊より飛び立った飛行機三百五十機は真珠湾内に停泊中のアメリカ太平洋艦隊を奇襲攻撃して戦艦八隻と艦船十隻を撃沈、大破し、更に飛行場の航空機四百七十九機に大損害を与えた。戦線は更に拡大し、昭和十七年六月には北太平洋のミッドウェー海戦において日本海軍は空母四隻を失い、搭載飛行機と鍛練された搭乗員を海中に失い大損害を受けた。続いて八月には米海兵師団がガダルカナル島に上陸して米軍の反攻が開始され南方戦線はジリジリと圧迫された。昭和十九年七月にはサイパン島で日本軍は全員玉砕した。米軍は直ちにB29大型爆撃機の飛行場を完成させ、日本の本土を直接攻撃することが可能となった。

このころになると東京の各町内や工場では防護隊が編成された。空襲警報が発令されると町会長は防護隊長となり、男子は戦闘帽に巻脚絆（まききゃはん）で身を固め、女子はモンペのズボンに防空頭巾で竹竿（たけざお）で作った火叩きとバケツを持って集合し、隊長の号令を待つのであった。

昭和二十年三月九日にはB29一五〇機の大編隊が東京の上空に現れ、下町一帯に爆弾と焼夷弾を投下して二十六万戸を焼失させ、下町は焼野原となった。第二回の本土空襲は三月十四日大阪で十三万戸を焼き払った。続いて四月一日には米軍十八万二千の大軍が沖縄本土に上陸した。このころになると国家総動員令により全国の軍需工場には学徒挺身隊と地域の報国隊が多数配属された。安立電気には、お茶の水女子師範学校と近くの順心女学校から多数の女子学生が来た。また報国隊では麻布十番の芸妓も十数名モンペ姿でやって来た。職場では仕事の量より頭の数の方が多く作業の指示に苦労した一方、首都防空の命令が出され安立電気周辺の民家は陸軍の補充兵部隊が鋸（のこぎり）やロープを使って次々と倒壊していったその柱を使って古川べりに防空壕を作った。

一方、国民の生活物資は国家統制となり、お米は各世帯毎の人員構成により米穀配給通帳が配られ、定められた日時に配給所に集まり長蛇の列を作って購入する。衣料については一人ずつの点数制で衣料切符を渡されたが、品物が不足し、求めることは困難であった。石炭や石油も極度に逼迫（ひっぱく）し、鉄道の輸送力は低下し、ガソリン不足でトラック輸送も悪化し配給所への入荷がおくれて銃後の国民生活は苦しさを加えて

来た。地方の勤労報国隊は、飛行機を飛ばす代替燃料として松の木から松根油を採った。全くの一億国民総動員であった。

五月二十三日にはB29の大編隊が夜間に山の手一帯を焼夷弾攻撃で焼失させた。

私は安立電気で海軍無線機の製造課長兼検査課長だった。当日は、当直防護隊長であったので、戦闘帽に巻脚絆を付けて職場にいた。夕食も終り各職場では夜間作業を開始した直後だった。空襲警報のサイレンが東京の夜空に鳴り響いた。社内のスピーカーは「全員待避」を発令した。防空頭巾をかぶった工員たちは各職場毎に古川べりの防空壕に待避した。私は壕の入口から身をのり出して上空を見上げると東京の夜空は東京湾の海堡の砲台を始め周辺の防空陣地より照射する照空灯の強い光芒が交錯し、B29の大きな銀色の翼と四ツの丸いエンジンが見える高射砲陣地より打ち出す砲弾がB29の近くでポンポンと炸裂する。初めてみる実戦の光景は物凄いものであった。突然一機が五反田方面より侵入して来た。次々と油脂焼夷弾が投下される。これは打ち上げ花火のようで上空でパッと火が見えるとヒュウヒュウと高い音を出しながらバラバラ落下し、地上に落ちると信管が破裂してパッパッと火の子が飛び散り、附近の建物に引きついて火の手が上がり大火災となった。安立の木造二階建の工場からも火の手があがった「防護隊員消火」の号令で壕より飛び出しバケツリレーや消火器と火叩きでようやく焼失を防いだ。

五反田、恵比寿、麻布方面は一晩中燃え続けて一夜が明ける翌朝麻布工場の四階屋上にあった防空指揮所から西方を眺めると見渡す限り一帯は焼野原になり所々から白煙が立ちのぼっている。幸いにも私達の職場は無傷だったが、昨日検査が終わり梱包した十台の無線送信機は恵比寿の丸通運送から発送の手続きをしたので、焼け跡を歩いて見に行った。丸通の倉庫は周囲は赤煉瓦で頑強だったが屋根が瓦葺きだったので焼夷弾が貫通し、倉庫内の荷物は全焼し、無線機は四角い鉄枠のみが十個真赤に焼けて並んでいた。帰り道古川べりに建っていた輸送課の馬小屋に立ち寄って見ると灰の中に数頭の馬が焼け死んでいた。当時は軍需工場でも給食用の配給食糧は極度に欠乏していて昼食の雑炊の中にはお米が少量で全員栄養失調に陥っていた。あれを工員たちに食べさせようと頭に浮かんだ。帰社して直ちに食堂の沢村主任に「叺と大きな包丁と荷車を用意し、馬小屋に行き横になって焼け死んでいる馬の太股あたりの上等の肉を取って来い」と指示した。

快晴で暑い午後だった。数人の食堂係員が叺に入れて持ち帰って来た。大きな冷蔵庫に入れて保管し、翌日昼食の雑炊に入れて社長始め千名近くの全員が肉が入っていると大喜びでウマイウマイと食べた。

政府は宮中において御前会議を開きポツダム宣言を受諾して戦争終結を決定し、八月十五日正午、天皇陛下がラジオ放送によって全国民に「終戦の詔書」を告げられた。

満州事変が起きてから十五年の間、日本国民は「撃ちてし止まん」と戦意を燃やし、一方、苦しい生活を続けて来たのであったが、ついに終結の時を迎えたのである。同時に東京の空からB29の銀翼が消え、空襲警報のサイレンが鳴らなくなった。

防空訓練の日々

◆久松　安（80歳）

苦しかった配給生活

昭和十四年九月に価額統制令が出てこの日の値段で、一切の物価値段が抑えられた。昭和十四年十二月に木炭が配給となり、翌年に入ると米や小麦など主食が配給制となり、各世帯の家族構成によって配給通帳が渡された。更にマッチは一日五本。砂糖は一ケ月一人半斤（三百グラム）、魚は一人十匁（三十七・五グラム）味噌一人一ケ月百八十三匁（六百八十グラム）砂糖は茶碗に一杯。野菜は一週間一人五十匁（百八十七・五グラム）などと耐乏生活を強いられた。これも配給所への入荷次第で遅配が続くようになった。東京下町の大空襲で精米所が焼失し、玄米のままで配給された時には各家庭では一升ビンに入れて棒でコツコツと主婦達は長時間かけて搗き多少なりとも白米にして炊いた。

衣料品については一人一人に衣料切符を渡されたが、品物が不足で自由に購入することは困難であった。一方、ガソリン、石油などは極度に欠乏し、配給が困難でバスや乗用車には木炭車が現れ、車体の後部に丸い大きな木炭釜を取り付けてエンジンを回し、スピードは出ないが街を走り出した。

防空訓練

召集を免れた男と各家庭の主婦によって各町内に警防団が結成された。隊員の服装は男子は国民服に巻脚絆と戦闘帽を着け女子は筒袖の上衣にモンペのズボン、頭には三角形の防空頭巾で身を固め、バケツを持って街角の広場に集まり隊長の号令でバケツリレーの消火訓練を行った。昭和二十年三月九日、B29百五十機の大編隊は、東京上空に現れ、下町一帯に爆弾と焼夷弾を投下して悠々と南方に引きあげたが下町一帯はものすごい大火災となり、二十六万戸を焼き払い多数の焼死者を出した。

町々では一億国民総当たりの掛け声がわき起こり警防団の戦闘訓練が一段と強化され、在郷軍人の指導で突撃訓練が始められた。銃剣術の木銃の代わりに物干竿の太さの竹で先端を槍のように切り込んだ竿を持ち、隊長の号令でエイーエイーと掛け声も勇ましく、アメリカ兵が来たら刺し殺す戦法であった。当時を今となって追想して見ると全く馬鹿げた話で

あるが戦意を盛り上げるには素晴らしいものであった。

有栖川公園で軍事訓練

私は軍需工場であった麻布の安立電気で海軍無線機の製造部検査課長であった。陸海軍の監督官の命令で防護隊が各職場ごとに編成された、陸軍関係が第一防護隊で、海軍関係が第二防護隊、それに防空指揮所が設置された。

防空訓練は工場の空地でバケツリレーの消火と、棒の先端にモップを着けた火叩きでの消火訓練では間に合わなくなり、近くの有栖川公園での連合訓練を作業を止めて、実施することになった。指揮官は、第一防護隊が陸軍予備中尉で、私は第二防護隊を指揮した海軍兵曹長の軍服を着て「関の孫六」の名刀を仕込んだ軍刀を抜き「気ヲツケ、右向ケ右、前エ進メ」と行進し、また竹槍で銃剣術式の突撃訓練を行った。二百名位の防護隊員は、軍隊式にきびきびと二時間位の猛訓練を終わり、職場に帰り直ちに兵器増産に精魂を打ち込み、一言も不平不満の声を聞いたおぼえがない。

また一般家庭では生活物資の配給が逼迫(ひっぱく)し、栄養失調になったのであったが「欲しがりません勝つまでは」の合言葉で必死に頑張りを続けたが、昭和二十年八月十五日正午天皇陛下のラジオ放送によって終戦を告げられ、東京の空から空襲警報のサイレンが消えた。

(港区教育史資料)